

ペンフレンド (第五章恋愛論)

中村 アキヤ

八月二十二日の金曜日、あきらは背広をつくるため有楽町のそごうデパートに母親の美知子と出かけた。母親と外出するのは何年ぶりかであった。午後遅くあきらは西銀座の駅でめぐみと逢う事になっていたが、約束の時間が差し迫ったので、急に母親をめぐみに紹介することに決め母に告げた。

母の美知子は、

「なんでこんなことを急に云うの？」とちよつと驚いたが改まって逢うよりは、と仕方なしに承諾する。

「母と一緒にそごうまで来ていたものだから、丁度いい機会だと思って貴女に会って貰う事にしたんだ」

めぐみは西銀座の駅で突然あきらの母親に紹介されびっくりした様子だったが、落ち着いて挨拶し、母と別れたあともあきらにその事については何も云わなかった。

「いつもあきらがお世話になっております。いつか電話でお話したことがありますましたわね？」こう言いながら、美知子は同世代の娘を二人持つ母親の目で短時間のうちにめぐみの全てを観察していた。

第一印象として、なんて品のいいお嬢さんだと思った。目元の涼しい、睫の長い色白の顔立ちは、とびっきりの美人とは言えないまでも水準を越えていた。

めぐみは、急いできたのか、または突然の対面で緊張したのか、小鼻の周りの汗をおさえながら母親への応対もすっかりしていた。白とブルーのチェックの半袖スーツのめぐみは、このままどこかの若奥さんといつてもおかしくないような、自分の娘達にはないしつとりとした落ち着きを感じた。息子も結構やるものだなとは、若い彼らと別れてからの正直な感想だった。

その夜、めぐみはあきらの母に紹介されたことを意識したのか、これまでの多愛のない話を打ち切るように、断片的ではあるが、ちよつと真剣に恋愛論を切り出した。

「ねえ、仲良くなったカップルっていつまでも友達でいられるのかしらね？」

男女間に本当の友情は存在するのかしら？ 人間の愛情って周囲の環境が変れば冷めてしまったりしないのかしら？」とか、

「私も今は貴方に仲良くして貰っているけど、貴方が卒業して社会人になり、どこか遠くへ転勤などしたら、人間っていつの間にか疎遠になってしまうのね？」

私も以前漠然と好きだった人がいたけど、なんのきっかけもなかったのも、そのままになってしまった人がいたわ。この間父にいわれてお見合い写真を撮ったけれど、その写真はどこへ流れてゆくのか、わからないの」とか。

「津田の同期生も、卒業直後はよく連絡しあっていたのに、みんな自分の新しい生活に忙しくてだんだんバラバラになってきたみたい。あの黒川さんは来年にはママになるっていうし」など。

一方的にいろいろと話をされても、自分の意見を的確には表現できなかったあきらは三日後に手紙を書いた。

「めぐみさん。急に涼しくなりましたがお元気ですか。こちらはもう残り少ない夏休みをどう過ごそうかと計画に余念がありません。

さて先日貴女とお話した事、僕はこれまでただ漠然としか考えていなかったことに気付き、この三日間よく考えてみました。この間は突然、あまりにも突然に話が出て、何とか自分の思っている事を上手に表現しようと努力したのですが、自分の考えていた考えを纏めるには、話の内容が余りに断片的にすぎました。貴女の前でただシドロモドロになっているだけでした。(可哀想に)

僕は貴女を好きならば、それでももう全ては良いのだと思っていました。それはどうも甘い考えだったようです。あのとき僕は自分の微妙な心の動きを、あれ以上論理的に説明することはできなかつたし、また説明の必要もないと思っています。(そうでしょう?) まあとにかく僕が真剣に考えた事柄をお読み下さい。なんてたいしたことは書いてありませんが)

僕が貴女にどちらか早く返事をしてくれと云った事を覚えていますか? それは余りにも自分勝手な要求でした。貴女の立場になって考えてみると、ハッキリとした返事はできないのが当たり前です。貴女の優しい性格からは今まで付き合っていたのをあっさり断る訳にはいかないでしょうし、今の僕では一足先に社会に出られた貴女にとっては未だに親のスネをかじっている青二才としか映らないでしょう。全く頼りないと思われるのは当然です。むしろそうお考えにならないかつたら不思議です。

こんな僕も時間が経てば、社会的にも一人前の市民としての資格も身につきます。貴女も心配なさらずに済む時がきつと来ると信じていますし、来なければ困ります。

なるほど社会に出て環境も変わり、いろいろな人に接する機会も多くなることは認めます。でも僕にとって本当に素晴らしいと思える人は貴女を含めて何人もいないのです。例えそのような人が別にいたとしても、現在の僕達みたいに、

偶然に出会い、しかもこんな話が出来るほど親しくなる人が、僕の若い限られた時代に何人現れるか疑問です。（これは貴女にとつても同じではありませんか？）

貴女は経験上環境が変わると人の考え方（愛情）も変わってくるをご心配のようですが、愛情なんてそんなに簡単に消えてしまうものでしょうか？

消えてしまうとしたらそれは真の愛情ではなくて単に愛情だと思ひ込んでいただけなのでしょう。

愛情は長続きしないこともあり得ましようが、それだからといってこれまでの世の中の人は全部不幸だったかというところではないでしょう。年をとつてからもお互いに憎まれ口を叩き合いながらも、今の我々のように仲の良いお友達のような気分で暮らせれば素敵じゃあないですか。貴女はあなたの経験されたほんのちよつとの傷（？）を、その印象が新しいばかりに全ての場合にあてはめていらつしやるのでしょうか。客観的に考えてごらん下さい。貴女のこれまでの経験なんて人生全体から見ればたいしたことではないのですよ。

とにかく僕はこのような話は僕が卒業する頃にしようと思つていたのですが、先日貴女に切り出されて却つてよかつたと思つています。今ならお互いにゆつくり考える時間はあるし、それに来年の三月頃に急に話をして互いに意を尽くせないまま別れてしまうのは目に見えています。

これからも僕達はこのことについてもまた他のことについても率直に何回も話し合う必要があります。お互いにもっと良く理解すべきです。僕も貴女のことを今まで以上に知りたいし、貴女にも僕の良いところを知つて戴かなければなりません。（かえつてアラが見えてしまふかな？）その上で来年の春にでも結論を出しましょう。学生生活の最後の半年になつてこんなことを話せる相手がいて僕は本当に幸せだと思つています。

思いつくままに書き散らしたのでまとまりのない文になりました。文脈がつかないところもどうかご判読戴いて僕の真意を汲んで下さい。今度いつか貴女の反論を伺うことにしましょう。では今週の末（だったかな？）お元気で志賀高原へ行つてらつしやい。

めぐみ様

あきら

八月二十五日

めぐみはあきらからの手紙をゆつくり読み返した。あきらがふだんに似ず真剣に考えて、書いている様子がめぐみにも伝わってきた。でも彼の手紙にはなんの結論めいたことも書いてなかった。単に結論を半年先のあきらの卒業まで延ばそうというだけではないか？卒業後すぐに結婚する事態になりそうもないし、

とってこれまでの仲を清算し別々の人生を歩むなんていう結論も嫌な選択だった。結論を引き延ばすしかないのかな、とめぐみは思った。そしてそんな気持ちを引きずったまま役所の人達と週末旅行にかけた。

志賀高原で白樺の表皮の張ってあるはがきを買い求め、夕食後同僚に冷やかされながらあきららに返事を書いた。

「例の通りお天気は素晴らしく心ゆくまで高原の澄んだ空気を味わい、冷たい風にふれていると毎日あくせくと働いていたことを忘れてしまいます。何だか学生時代に帰ったような気がします。今日は上林温泉から山越えをして丸池まで登りましたが、足弱の男性共を引っ張って行くのですから大変です。

丸池でリフトに乗りましたが、貴方が去年の冬スキーをしていたのはこの辺かしらと思うと何だか感無量でした。でも今は一体どこがスキー場になるのかしらと思う位ブッシュが繁ったり、畑ができたりしています。後部にスキー立てのついているバスを見ていると今年こそスキーに来たいものだとつくづく思いました。その時はよろしくね。

PS お手紙拝見しました。冷静にいろいろ考えて下さってとても嬉しく思いました。反論の余地がないではありませんがわたしも貴方のお考えに同感です。

又そのうちにいろいろお話ししましょう。当分何も考えないで、ぼやっとお付き合いして欲しい気も多分にありますけど…。学生生活最後の夏休みを慎重にお使い下さいませ。ごきげんよう。

あきら様

志賀高原にて 青木めぐみ

八月三十一日

九月になるとあきららは卒論実験、期末試験の準備に忙殺される。ただ恒例のヨット部のパーティに誘うためにめぐみに電話した。その日めぐみは大丸に買い物にゆく予定があり、その途中合間を見て、会わないかと逆にあきららを誘った。

二人は二時間ほど新宿御苑を散歩する。あきららは大丸までついてゆき、買い物に付き合った。めぐみは食料品売り場では、メモを見ながらてきぱきと買い物を進め、購入したものをあきららに持たせた。あきららはデパートの地下の食品売り場に入ったのは初めてで、混雑した人混みをぬって各売り場を探し、買い物を進める若奥様然としためぐみについてゆくののが精一杯だった。肝心のパーティにはめぐみは参加に前向きだったので気をよくして別れた。

期末試験がおわると、あきららはクラスメートの吉野と北八ヶ岳にのぼった。

吉野は武蔵高校出身の、広い額と彫りの深い顔つきの学者然とした落ち着いた学生であった。二人は茅野からバスで明治湯までゆき晩秋の麦草峠に向かった。

麦草小屋の客は彼等二人だけだった。小屋の主人も寂しかったとみえ、夕食後いろいろな話をしてくれた。今年は雨が多かったので茸が良く取れたとか、今頃は小屋のゴミをあさりに狸の親子がくるとか…。

「十月末には小屋を閉めるのですが、そうそう昨年冬、十二月末に遭難者が出ましてね。道に迷って夜中に小屋に着いたらしいのですが、小屋は嚴重に閉めてあるので入り口を探して小屋の周りをグルグル回った形跡があるんですわ。

結局トイレの汲み取り口に頭を突っ込んで亡くなっていました。その時見たエンジ色のヤツケが妙に印象に残ったのですよ。

そして今年の三月に小屋をあけて三、四日経ったとき、気が付いたらエンジ色のヤツケを着た人がストーブの向こう、そうお客さんが居る辺りに座っているんですよ。あれ？何時いらしたんですかと言いながらお茶を出したら、その人は用ありげに立ち上がってトイレに行ったらしいのです。しばらく待ったが帰ってこない…。待てよ？ あのヤツケ見たことがあるなあ、と。小屋の戸が開いた形跡もないし、と思つたら急に怖くなりましたよ。お茶はちゃんと出してあるしね、幻影でもみたのかと思います」

快晴の翌日、二人は遅立ちで、吹き溜まりに雪がついている縞枯山、横岳を越えて双子池の無人のロッジに泊まった。周囲を山に囲まれた窪地に雄沼と雌沼があり、雨季には両方から水が上がってきて一体になるという。ロッジは二つの沼の中間点でやや雄沼に近い沼畔にあった。二人はフランスパンにバター、チーズそれに淹れたてのコーヒーの夕食を摂った。

食器を洗いに行った吉野の「おい、中山、外に出てみるよ」の声に、あきらは暗い小屋から出た途端、名状しがたい光景に声を失った。

正面の山の端から、雲ひとつない夜空に大きな大きな丸の月が昇っている最中であつた。月光を浴びた雄沼の水面上を霧が帯状に雌沼に流れ込んでいく。全てが透明な青の世界。静寂そのものの中で二人は丸木椅子に並んで座って、しばらく夫々の想いにふけた。

「君は恋人はいるのか？」突然吉野は眉根を寄せた深刻そうな顔であきらに質問した。

「いると聞いていいのかなあ」とあきらが答えた。「でも相手がどこまで考えているか分からないんだよ」

「実は俺は今悩んでいるんだ」

吉野はあきらの返事を最後まで聞かずに問わず語りに話し始めた。

「俺は兄貴の婚約者が好きになってしまったんだ。二歳年上の兄貴は今カリフォルニア大に行っている。彼女はときどき家に遊びに来るのだが、両親は年だけ

ら俺がお相手役なんだ。何回も会って散歩したり、映画を見たりしているうちにお互いに好きになってしまつて。来年兄貴が帰つて来たときに、なんていへばいいのか困つてしまふよ。君ならどうする？」

翌朝二人は蓼科山を左に見ながら女神湖方面に進み、都立大付属高の蓼科寮に向かった。

寮では付属高校卒業生の曾我と平田が申し合わせた通り待つていた。その夜と次の日は四人で一日中麻雀をして過ごした。

「お帰りなさい。このところ山での遭難が相次いで起こっているので心配でしたが、無事でよかつたわ。珍しくお天気にも恵まれた山行きでさぞ楽しい数日をお過ごしになったことでしょう。石の建物の中に閉じこめられ、美しく晴れた秋空を眺めるのが精々だった私にとっては本当に羨ましい限りです。

また、貴方に怒られてしまいそうなこと。土曜日のヨット部のパーティ行けなくなつてしまいました。実は課内の旅行が三十一日、一日にあることになりました。始めはそれよりも一週間後の予定でしたが旅館などの都合で一週間早くなつてしまつたのです。本当に残念で泣きたいくらい。去年からそのパーティついていないようですね。どうぞ悪しからずね。私を誘つて下さるの、もう懲りぢやつたでしょう？」

今日は国会の召集日でした。後で考えてみればいつもより特別忙しかつたわけでもないのに、せわしなく落ち着かない日でした。明日は開会式、天皇陛下をお迎えしたり、外交官や大使の方々のお世話をしたり又忙しい一日でしょう。

朝晩とても冷えますからお風邪を召さないようにね。

お氣が向いたらお手紙かお電話（なるたけならお手紙をね）下さい。土曜日のパーティお楽しみにしますよう。ごきげんよう。

あきら様

めぐみ

十月二十七日」

十月になつて、あきは卒論のためタイプライターを至急貸して欲しいと電話でめぐみに頼んだ。めぐみは押入れから古いレミントンを探しだし、出勤の途中、大混雑の新宿駅まで運び、朝の雑踏の中であきらに手渡す。そしてその日のうちにめぐみはあきらに葉書を出す。

「さきほどは失礼しました。お待たせしてごめんなさいね。たまに朝早くおきると辛いでしょう。取りあえず簡単に使い方をお伝えしておきます。

本体と蓋は横の留め金をはずし、後ろの留め金から抜き取ると別々になります。マージンはペーパーレストの裏側にあるかんぬき状の形をしたもの（二つあります）で両側をきめて下さい。上から押して動かすと自由に動きますから。

昨夜ためてみたところによりますと数字のいくらかとコンマを打った後アームがよく戻らないようでしたが、指ではじくようにして打つか、コンマの場合にはキャピタルの方のコンマを使うかして下さい。きつとお使いになり難くて却って悪かったかなとも思いますが、頭のいいところでいろいろ工夫してお使い下さい。

もしリボンが動かなくなった時は左端にある上下に動く小さな丸いものを上か下かに動かして下さい。その他のことは大体他のタイプと同じですからお分かりと思いますが、なにかありましたらお会いした時にでも、お電話でもご説明します。あまり良いタイプではないですから、どんなに荒っぽくお扱いになっても結構よ。もし壊れてもお気になさらないで下さい。もともと壊れていたのかも知れないのですから。その場合このタイプを買った店で直させますからおっしゃって下さいね。ではまた。

あきら様

めぐみ

十月二十日

めぐみは参議院庶務課の課内旅行に発った。あきはヨット部のパーティーを諦めた。卒論のためやることは山ほどあるのだ。ただ、めぐみに約束を反故にされた分はいつか必ず埋め合わせをさせてやろうと思った。

「お帰りなさい。貴女にこう書くのは初めてですね。お天気も誰のせいかわかりませんが雨も降らず行楽のシーズンに先駆けて楽しい週末を過ごされたことと思います。

僕の方は貴女がいないので仕方なく土曜、日曜と朝からお借りしたタイプで英語の文献をポツンポツンと打っては、青空に浮かぶ雲をポカンと眺めて、いつもの貴女の気持ちを味わっていました。誰にも都合というものあるし貴女に恨み言を云っても仕方ありませんからパーティーはあつさり諦めて、用意した切符は友達にダンピングで売りつけました。今度のことがあっても何回振られても決して貴女を誘うのに懲りたりしませんからよろしく。

さてだいぶ古い話ですがこの前新宿御苑を一緒に散歩した楽しさもさることながら、大丸への買い物にも連れて行って戴き、荷物をもたせて貰ったことが皮肉ではなしに嬉しかったのです。僕のこういう気持ち貴女には分からないかも知れませんが…。

その上先日はご親切にタイプを早速貸して戴き感激しております。中央線の

あの凄いラッシュに重い荷物で貴女には気の毒したと思っています。このシーズンになると学校では皆別々の研究室に別れてバラバラになり、クラス揃って遊ぶことはなくなりました。そうすると貴女の存在は僕にとって益々大きなものになってきます。

僕もあと一週間で二十二歳の若さともお別れですし、その前に貴女のお顔が見たいので今週末金曜か土曜に逢って下さいませんか？ いずれ木曜日あたりにお電話します。最近こちらの郵便物はストのために遅れがちで貴女のお手紙も土曜の午後遅く入手した始末です。

豊島園の屋内スキー場が十一月一日から始まったので、今から張り切っています。スキーも今年は是非一緒に緒したいですね。貴女の転ぶところ想像しただけで胸がスツツとします。ではお元気で。

めぐみ様

あきら拝

十一月二日

めぐみは週末の予定が詰まっっていて、あきらから電話が来るのが恐ろしかった。誘われるのは嫌ではなかったが、誘いを断る度に知らない中にあきらを傷つけているかも知れないと思った。

十一月下旬のN響にはあきらは出かけなかった。代わりに妹の幸子がかり出され、日比谷公会堂でめぐみに挨拶した。めぐみは親友の黒川と一緒にだったが幸子に夕食を奢った。

「お兄ちゃん、めぐみさんって素敵な人ね！美人で人柄がよくって、ご両親に可愛がられて育てられたって感じだわ。よくあんな良い人と知り合いになっただわね。大事にしなければダメよ」と帰宅後幸子はあきらに率直な感想を伝えた。あきらはそれを聞いて満更ではなかったが、兄貴の権威を崩されまいと妹には喜んだ顔を見せなかった。

幸子は母親の美知子に、兄貴には云えなかったためぐみの一挙手一投足を詳しく報告した。美知子はあきらへの手紙の頻度が少なくなっていることに気づいていたが、息子はまだ若いし、これからもいろいろ起こることを予感していた。見るともなく見たハガキの文面は、いつも会えるとか会えないとか他愛のない内容で、未だ大人の付き合いではないと感じていた。

「先日はお会いできなくて残念でした。あいにく雨が降ってしまったので、夜が随分遅くなってしまったので妹さんお一人でお帰しするのはちよつと心配でしたが…。

陽気もぐつと冷え込んでいよいよスキーシーズンですね。私もスキー一式をやっと買いました。ところが二十八日が通常国会の召集日となるらしく、二十五日から行く積もりだった蔵王にどうも行けそうにありません。ここが国会職員

の辛いとこだと皆でがっかりしています。ではまたお会いしたときにね。ごきげんよう。

あきら様

めぐみ

十一月三十日

十二月二十日から蔵王に行くあきらは、年内にせめてもう一回は逢ってくれとめぐみに頼むが、いろいろ理由をつけて断るめぐみに少々腹が立ってきた。

腹いせに十二月のN響の定期演奏会は勉強が忙しいからと欠席し、妹の幸子が再び狩りだされた。そうとは知らないめぐみはN響のあった翌日、国会内の郵便局から即日速達のはがきを出す。

「やっぱりいらつしやれなかったのね。お会いできるかも知れないと思っていましたのでちよつとがっかりしました。試験勉強、さぞはかどったことでしょうね。(少し皮肉) まあ最後のご奉公ですからしつかりね。いつもいやだなあと思う試験(僕は違うつて?)も最後かと思うと何となく名残惜しい気がなさるでしょう。

昨日のN響は割合によかったですよ。ドボルザークのチェロ協奏曲がよく、十七歳のチェリストは仲々の熱演でした。チェロの音色の魅力を再認識しました。悲愴も私の好きな曲なのでちよつといい気持ちでした。

机にかじりついているであろう誰かさんが、いささかお気の毒になりましたけれど、二十日からスキーに行ける人には同情しないことにしました。

私の方は二十九日が国会の召集日なので、二十七日の日曜ももしかしたら出勤になるかも知れません。無論暮れの二十九日も。折角買ったスキーも壁に立てかけられたまま可哀想です。家の建て替えもやつと一段落いたしました、といってもまだ届かない家具があったり、電気の許可が下りないなどで今年いっぱい落ちつけそうありません。この間お電話あった時、年内に一度位はお会いしたいと思っていましたが、やはり貴方がおっしゃったようにちよつと無理ですね。足など折らないように、私の分まで楽しんで来て下さいね。気をつけていらつしやい。

あきら様

めぐみ

十二月十七日

十二月二十日にあきらは大学の友人と蔵王にスキーに出かけた。友人は二人ともカップルできているのであきらは強い疎外感を感じた。夕食後楽しげに団らんを続けているカップルを置いてあきらは一人部屋に戻る。

こんな時人間は悲観的になるのか、めぐみは自分を好きではないかも知れないと思いはじめる。余りしつこく誘うのでうるさく思っているかも知れない、と

思うとあきららは、この先どうすればいいのか判らなくなった。

無力な自分がかくもどかしくてなんとなく疲れを感じた。来年は卒業ということ
で少し焦りを感じているのかもしれない。でも結局めぐみにきれいな蔵王の樹
氷の絵はがきを一冊買って、夏と同じような連続手紙を書き始める。

「可哀想なめぐみさんへ 十二月二十一日 雪

二十一日元気に蔵王につきました。積雪量は、下のゲレンデはスキーには不十分ですが、ドッコ沼まで登れば所々ブッシュがまだ顔をだしてはいますが粉雪が六十センチ程あります。折角新調したスキーを壁に立てかけたまま年の暮れ遅くまでお仕事しなければならぬ貴女が可哀想です。(本当に!)

僕は今年の十一月に貴女に会ったきりでスキーにきてしまい非常に心残りですが、貴女の方では厄介払いをしたとばかりに、僕の知らない人とデートばかりしているのでしょうか? 結局可哀想なのは貴女に同情している筈の僕なのかも知れませんか?

「冷たいめぐみさんへ 十二月二十二日 吹雪

我々の泊まっているロッジは昔皆で食事をしたドッコ沼の食堂の丁度向かいの小屋です。厚生省の保養寮とかで安い上に食事は素晴らしく良く、夜はペチカを囲んでハイファイを聴いたり、ランプなどできるので、貴女と一緒にないので何か物足りません。考えてみると今年は貴女に振られどしどしの一年でしたね。毎週電話してその度に貴女の都合の悪いという口実? よくもいつもいつも違った言い訳を考えつくものだと感じています。

いい加減貴女に電話するのが恐ろしくなってきました。今夜は窓の外は吹雪で全てのが冷たく冷えきっています。貴女という人はそれよりも冷たい心の持ち主なのですか?

「麗しいめぐみさんへ 十二月二十三日 晴

貴女の魅力というのはなんでしようか? 美人で、(ここをなんと書いていいか悩みました) 書けば書くほど実体と離れてしまいそうだから書くのをやめませう。ただ通り一遍の美しさではなく頭の良さ、知的な美しさがあると云いたかったです。こんなことを書く僕は貴女からみればまだほんの子供にみえるでしょうね。僕に言わせればお姉さんぶる貴女がとても可愛らしい、といったら怒られるかな?

「めぐみさん覚えていますか? 十二月二十四日 雪

クリスマスイブなので小屋の泊まっている人達全員でダンスをしました。電

気を全部消して明るいものと云えばペチカの薪の燃える炎と、窓の外からの淡い雪明かりだけで、とてもロマンティックな雰囲気でした。

貴女は覚えていますか、初めて一緒に蔵王に来た時。パットブーンのレコードでダンスをしましたよね。今晚貴女と踊れたらと何度思ったか判りません。卒業する前にせめてあと一回位はスキーにご一緒したいのですが、またその時になって貴女のご都合が悪くなるのでしょうか（皮肉たっぷり）甘い期待はしないことにしました。でも貴女は、一度位は無理してもスキーと一緒に来て下さって、又踊ってくださいるのでしょ？」

「サヨナラは堪らない

十二月二十五日 晴

昨夜の雪で所々顔を出していたブッシュもすっかり埋まりグレンデも最高のコンディションになりました。僕のスキーもやっと調子が出始め（調子なんてあるのかって？）メキメキ上達してきたようです。今度もし、ご一緒できたら貴女の前で自慢できそうです。

もう学生生活もあと三ヶ月、悔いを残さないように充分堪能する積もりですが、それには貴女の存在が不可欠なようです。いつかお会いして胸のうちを洗いざらい話してみたいような気がします。あと三ヶ月で貴女とサヨナラなんて堪らない気持ちです。

この手紙今年中に着かないかも知れないので明朝蔵王温泉まで降りて投函します。どうぞ僕を余りひがませないで下さい。最近のN響に二回とも行かなかつたのはいつも会って下さらない貴女へのせめてもの抵抗なんです。白状すると試験勉強していた筈のN響のあった晩は友達の家で酒を飲んでいたので。

行きたかったのを我慢してね……。旅先で淋しかったものですから、なんだか詰まらないことを書いてしまいました。どうぞお気に障ったら破くなり焼くなりして下さい。どうぞよいお年を！ 来年もよろしくお願いいたします。

めぐみ様

あきら

こうしてあきらの大学生生活最後の年は暮れていった。めぐみのことは大好きだしいつまでも相手をしてきている事に感謝していた。だがすぐに結婚するなんてことは考えてもいなかった。いつまでもこんな状態が続けば良いとあきらは自分に都合よく考えていた。

めぐみは国会の仕事で三十日も遅くまで働き、大晦日は家の手伝いに忙殺された。例年父親のところには大勢の年賀客が押し寄せるのでその準備が大変なのだ。除夜の鐘を聞きようやく静かに時が流れるようになってから、あきらの手紙を読んだ。

父親は来年になったら取引先の社長から話のあった縁談を切り出すにちがいない。父親のすすめる誰か知らない人のお嫁さんになってしまふのだろうか？あきららは未だ学生だし、いつも夢みたいなことばかり云っている。恋に恋しているくらいがある。逢う度に親しくなってくるけれど、このままでは彼の良いお姉さんで終わってしまう可能性もある。

めぐみは、瞳を閉じてはじめてあきららに会った日のことを思い出そうとした。あれは遠い日の奇跡だったのかも知れない。あきららにはトキメキを覚えたのも事実だが、これが私のはかない青春なのかしら？

この冬が終わるまでには人生の方向を見出さねばならない。あきららと一緒に迷うことになるのかな？ 来年はどうなるのだろう、と思いつながら何時の間にか眠ってしまった。

(続く 1112語)